# 日本書紀傳 卅一卷三

和書
一〇五二二號

百二十五

内閣文庫

| | | |
|---|---|---|
| 番號 | 和 10522 | |
| 冊數 | 156 (134) | |
| 函號 | 特 85 | 1 |

内一六六八三號

国立公文書館
National Archives of Japan

教部省文庫印
内閣文庫
古政官文庫

ふ口訣ふ三熊大人順父孝儀以不咎ニ神貴ニ正理孝道之謂也と云るハ如何ゝ言ゞ若天穂日命不忠の神なりしむふハ天照太神ハ御祖ふ坐し御兄天忍穂耳尊ハ申さバ君上の如くふるふふ對ひて其罪如何計の事あらゞや然ら不孝不忠を兼たる父の悪事ふ從へる名ハ爭でか孝とハ云むや是亦不忠ふして不孝子と云べし此等ハ前後の見合も無く首尾の照應も無く唯古人の此を於毋祈理ゞ訓誤れりふ依れりふて祝詞ふ隨父事氏と有るも等閑ふ見過しなりし僻説なり又纂疏ふハ順阿順也非孝順之義と有も右の僻訓ふ就ての御説られバ甘ひ難し此事ふ至りてハ賀茂鈴屋二大人の明解實ふ千古の卓説有ふ起されて予も如此く明らむる説有て其二翁の説ふも悖うて又別ふ一家の説を立る事を得たり實ふ二翁の恩賜此ふ言擧げ盡す可くも非ず

# 故高皇産靈尊丙戌會諸神問當

遣者僉曰天國王之子天稚彦
是壯士也宜試之於是高皇産
靈尊賜天稚彦天鹿兒弓及天
羽羽矢以遣之此神亦不忠誠
也來到即娶顯國王之女子下
照姫亦名高姫亦名稚國玉因留住之曰
吾亦欲馭葦原中國遂不復命
是時高皇産靈尊怪其久不來
報乃遣無名雉伺之

天稚彦の件ハ至りてハ君臣の大義の重く畏敬〳〵可畏き道理を見奉り知べき所ある者ありけり此事筭

一ノ一書ニハ天穗日命ヲ遣シ給ヘリシ事ハ無クシテ
直ニ天照太神勅天稚彦曰豐葦原中國是吾兒可王之
地也然慮有殘賊强暴橫惡之神者故汝先往平之乃賜
天鹿兒弓及天真鹿兒矢遣之天稚彦受勅來降則多娶
國神女子經八年無以報命故天照太神乃召思兼神問
其不來之狀時思兼神思而告曰宜旦遣雉問之於是從
彼神謀乃使雉往候之下略ト所見ナリ又古事記ニハ是
以高御産巢神天照太御神亦問諸神等所遣葦原中國
之天菩比神久不復奏亦使何神之吉尓思金神答白可
遣天津國玉神之子天若日子故尓以天之麻迦古弓天

之波ニ矢賜天若日子而遣於是天若日子降到其國即
取女大國主神之女下照比賣亦慮獲其國至于八年不復
奏又遣曷神以問天若日子之淹留所由於是諸神及思
金神答白可遣雉名鳴女時詔之汝行問天若日子狀者
汝所以使葦原中國者言趣和其國之荒振神等之者也
何至于八年不復奏之見元ノ其狀殊ニ委ニくあり有
けり故今其傳ニ共を取合せて說を成べきあり大凡
此正書の文と事を約めて書きれたれば其限ニ
て ハ濟されぬ事多さが故ニ一書及他書ニ按合せて
說を成されバ其義を難得き事ゐ多ありける漢籍
春秋とバ左氏公羊穀梁の此ニ故高皇産靈尊更會諸
三傳を以て說ニ似たり
神云くハ上ニ天穗日命を比及三年尚不報聞次ニ大（其子）

皆三熊之大人を此亦順其父遂不報聞と有を受て言
を起す所ふて古事記ふ是以高御産巣日神天照大御
神亦問諸神等所遣葦原中國之天菩比神久不復奏亦
使何神之言ふ思金神答曰云〻と有り是以て同ド意
味あり然〻て此も思兼神の思慮ふ依らせ給ひるが
く其神量の如くハ非ず〻て却りて返矢の御政ふ及
ぶと云ハ其神量の已ふ空〻く成ればが如〻と雖も
其結末ふ至りて天神の天神たる所以思兼神の思兼
神たる所以天穗日命の天穗日命たる所以大國主神
の大國主神たる所以ふ詳ふ顕はれさせ給へりけ

ら然らハ出雲神賀詞ふ天穗比命ヲ國體見ふ遣時ふ
天能八重雲ヲ押別氏天翔國翔氏天下ヲ見廻氏返事
申給久豊葦原乃水穗國波畫波如五月蠅水沸支夜波
如火気光神在利石根木立青水沫毛事問天荒國在利
然毛鎮平天皇御孫命ふ安國止平久所知坐之米止申氏
已命兒天夷鳥命ふ布都怒志命ヲ副天天降遣天荒夫留
神等ヲ撥平氣云〻と有て此ふ天稚彦の事無さハ上
九十一丁
百十六丁ふ注らが如く天穗日命御父子の未復奏〻
給ハざり〻以前ふ遣はされ〻を其神ハ行違ひて復
命〻給へりけれバ全ふ其御父子共ふ預らせ給ハぬ

事あればありけり然して彼螢火光神蝿聲邪神の如き此國に在ゆる荒振神の本說は其神の復奏して給へるに因て天神も然る細々き事共をば初て所知看けるに此に天稚彦を遣して給へる程は其荒苦たる消息を未知看ざりし故に第一の一書に天照太神勅天稚彦曰豐葦原中國是吾兒可王之地也然慮有殘賊强暴横惡之神者故汝先往平之と有と推量に詔給へる事右に然慮と有を以知べし古事記御天降段(始天穗日命を遣して給ふとて神議御在して坐す所なる天神の御言にも故以爲於此國道速振荒振國神等之多在是使何神而將言趣と有る以爲の言も正しく其有て見認給へるのは非る事なるを合せ曉に可し然るに此正書には天神の御言に然彼地多有螢火光神及蝿聲邪神復有草木咸能言語と書されて天下の本々然る細に所知食けるに趣るるは簡易に書さるとての後の事を前へ及ぼされなるあるに可因俱此六十三丁九十七丁に委しくこれを如し故天神の天稚彦を天降して遣して給へるは天穗日命御父子を國體見に遣して給へるに復奏して給はざるに就ては此國に殘賊强暴横惡之神有て甚く喧響るに沮すれて二柱神共に遂に復奏申さざるもあるかと所思して右の二神に抱ずて征伐の御使として天稚彦を降して其荒振神等を撥平させ給へ

▲偖此に載られず雖も第一の書及古事記の趣は此謀思策神の思慮に出たるか然るに平田史徵に天稚彦の思ふ所は金神の思慮に非りけり也と思ふに信に思金神の思慮に非りけり也と思ひ出て自作の或文に也則れりは深き心ありて看ずして神代の始終を貫徹す見解無き私言ぞ云へ

△伊勢風土記ハ亦部詔天日別命日國有天津之方宜平其國即賜標叙ヒ見元文

むとの御政ハ御在ー坐ガ故ハ天鹿兒弓及天羽ニ矢を賜へるあて崇神天皇十年御紀四道將軍を四方ハ頒遣さる〜所ハ若有不受教者乃擧兵伐之既而共授印綬と有る印綬ハ兵器を印綬と爲て賜へるあて軍防令ハ凡大將出征皆授節刀と有る類是なり其由下百三十五丁ハ云べー然ーて此ハ天稚彦是壯士也宜試之と有る壯士ハ天穗日命の神傑を斥候ハ遣ハされたるハ對へて此武神を征使と爲て遣ハさむと選申されーなり宜試之と有ハ此國の動靜未定らるるハ依て先此神を遣ーて其所置を見給ひ其消息ハ依て計

ハせ給ふ可く議白せるハて先の天穗日命ハ可不試歟と限りて申せるとハ異ハて少う危ふむ意味無ハハ非ずるも有けう果ーて此神忠誠なるざりけう此神亦不忠誠せと有る亦字ハ天穗日命ハ響きて快ハらず此神者と有ま欲ー記傳ハ天穗日命の事を注ーて云く三年ハ至まで待給へとも還來坐ぬ故ハ終ハ返事申さで止めるる物の如思ハれ奉りーなり云ー其ハ未返事せぬ程ハ其志趣知られざれバ唯忠なるぬが如ク聞えけむ書紀ハ天若日子の事を云所ハ此神亦不忠誠せと有る亦字ハ先の天穗日命を不忠誠と云ーて云るなり然れども此天ど云れたるハ未委ーざる說なり

稚彦も諸神の中ーう選擧れかる神なれバ本ーう武神なるガ上ハ其心の汚惡ーて降りーハ非めど

も此國に降著て漸次に清明き意ハ亡れたりとこ
ろハ所見なりけれ然るに大己貴神を媚和するどハ
此神の預らぬ筋にて唯荒振神の征夷ぐらのみ此
神の任なりけるを其事ハ忘果たる狀にて吾亦欲馭
葦原中國などゝ負氣無き心の起りしハ實に現心と
ハ見えざりけり第一ノ一書に多娶國神女子と有ハ其
下照姫なり外に娶る神ども多在りけゝ然のみな
らず此下に天稚彦親屬妻子と有れば天上にて已に
妻子有る神なりしを其妻子をさへに忘れけゝ古
事記に亦慮獲其國至于八年不復奏と有て實に現心

有る所行なりけり此に殊なる所由なひ有け
る其ハ傳十二百六十六上に注るが如く天探女と云
ふ鬼物の依託て此神に率こり諸の惡事を令成て終
に斃しつるなひ有けり然邪神に相率こり相口會
て疎ぶる上ハ其任に治給ひ難き理の隨に第一ノ一書
に故天照太神召思兼神問其不來之狀時思兼神思而告
曰宜且遣雉問之と有て此に雉を遣ハされしハ此天
稚彦なり勝れたる神なるべこり有め然るまゝに神
を見せに遣しなるべしハ終に其神に如ずして其可
否を正して復命さむ事ハ得しも非くまして殊に神

る〻ぬ物を以て今伺むあハ天稚彦が本心此ハ見ゆ
可く計濟ーて遣されなりけるハ天探女が進るハ隨
ひ天神の御使を射斃し（けるハ其天神の返矢ハ依て）立所ハ身死果てるむ有けり
是一時其謀の違へるハ出て天地と共ハ長く久〻く
君臣の大義を示ー捉させ給ふ大御政と成て思兼神
の思慮の至れる所此ハ在て言ハ出ても云盡ー難き
程の御事なるぞーー皇祖天神の世中を立給ふ神隨
く坎なる者みて伊弉冊尊の言先立ー過ふ依て其志
ー給へる大八洲國の御政と申すい甚奇〻靈ー
ハ尊卑君臣の差出來う彼黄泉國の混ひ〻二柱御
祖神の國を持別て所知食す神業定まり素戔嗚尊の
御荒ひ〻ー天津日嗣ハ定まる〻せ給ひ彼又石窟隱の
御時ー世中の事物器械の悉ハ調る〻素戔嗚尊の

○私記ハ更會諸神と左良ハ毛呂加美ヤ御津止倍天と有り其も悪ーくハ非ねども猶多〻知の言と湊訓も例の多きハ從可ー

神逐れ坐ー故ハ國引の御功立ち大己貴神ハ八十神
ハ窘〻れさせ給へるを以て國土を經營〻せ給ふ御
任と成〻せ給へるるどの如く凡ての事共一度ハ物
の差ひめ有て成來る業なるけれバ此も其一ハ置べ
き所ぞ○高皇産靈尊更會諸神を第一一書ハ天照太
神と出たるハ互ハ略けるめて其實ハ古事記ハ是以
高御産巣日神天照太御神亦問諸神等と有ハ如く相
並坐て事議〻せ給へる由上二十六丁ハ已ハ注せれバ凡
今云限ハ非ず諸神ハ右ハ依て諸神等と訓添ふ可く
會ハ都度閇氏と訓て上ハ召集八十諸神と有る召字
を略けるなり。○當遣者ハ上る〻誰者を何神と訓べ
き例ハ任せて此も可遣神と訓べー古事記ハ又使

河神之吉と見えたる者字を神と訓む例は上八十ふ一丁ふ
出せり○天國玉は天之と訓べし古事記ふは天津國
玉神と書せり此ふ神とも命とも無きは其子天稚彦
が忠誠あるぎりしふ依れるある可し偖此神は
其子の事ふ依て尊称を削り可き神ふは非ず天上ふ
て は決めて功德の大ふ坐す神と見えたり先國玉と
申す玉は借字ふて國魂の義なり其國魂と申す由は
傳サ九 サふ注るが如く其本主と坐す神の有ふ屬
て恩靈(シクミタマ)ふ功用坐す神ふ申す事大國主神の
荒魂をば大國魂神と称奉ると等しくるし御在し坐



けり偖此神は傳十九五百サ三丁サ二百九七丁ふ注り
が如く此神は正しく天手力雄神ふて御在し坐
けり神名式ふ土佐國吾川郡天石門別安國玉主天神
神と有る是其神ふて坐るふ其土佐郡朝倉神社は
風土記ふ土左郡有朝倉郷に中有社神名天津羽に神
天石帆別神今天石門別神子也と見えたる其天津羽
に神は味耜高彦根神の后天御梶日女命ふるむ渡りせ
給へりける此下ふ先是天稚彦在葦原中國也與味耜
高彦根神友善と有るども其后神の同胞ふ(後ふ)故ふ
天稚彦の喪をも弔給へり事と知られば天稚彦が

△出雲國香美郡の山中に友神村と云ふ處境有り其氏神を天稚彦と云傳へたる故の謂れか詳に雲首けなり事云ふなり

出自是を以明らむるか足れり但天石戸開の時か無比ぐ御功坐し此神か
して然る忠誠なるさる子を生給ひし事ハ有まじ
うけりと思ふも然る事なれども天稚彦初より然る
忠誠なるさる神なれて在りあハ天神の御選か擧ん
て彼國か使す可きふもも非りけり者をハ其忠誠なる
さりける事か至れるハ荒振
神か交うれたる故ぐうし○天稚彦記傳十三十八丁

ふ天若日子ハ阿米和加比古と訓来れり若然訓べく
ハ此記か訓「天如天」と注する例なるふ然も有ぬハ阿
米能と訓べきふやと思ふるも姑く舊訓か従ひ
つ「有り」古今集序(注又狭衣物語)あハ阿米和加美古と云ひ名義ハ
次なる壯士を盛人(サカリヒト)と注せれるか如くふて若く壯盛
なる謂なる可し此神か限るさる凡て何れの神なも人

ふも稚某と言の上か置るハ皆右の例か同じ神名式
か出雲國出雲郡(阿須伎)軒築神社ハ味耜高彦根神か坐なる
か同社(天)若日子神社同社天若日子神社と同社か二有
ハ其友善(サヒハ)しうし一時の靈と身死られし後の靈とを
別とか祀れるなるのり偖此神の住ハれしハ攝津國邊
なるし一なる可し一神名式か攝津國東生郡比賣許曾神
社名神大月次相嘗新嘗を臨時祭式か亦号下照比賣と見元た
るか万葉三二十二丁か久方乃天之探女之石船乃泊師高
津者淺尓家留香賞と詠るなどを思ふか必其近きか
住まれたるなるしう同式河内國丹比郡河麻美許曾(若江郡加奇良神社)

△下百五十下照姫命
條ニ見合ス可シ

△下座ハ天般石ニ拡ル
象ニ天降ラレタリ
由ヨリ可シ此ル例ニ
時ハ諸國ニ在リ資然
リ

神社鍬ト有ハ天稚彦の靈を祀れるゝ也の考有て
已ル傳三十ニ百十丁ニ注る由縁共を以て其然る所以
を明らむ可シ同郡大津神社三座と有ハ下照姫なる
可シ思ふ河内郡大津神社梶無神社ハ
ども皆由有を以已ニ注せり右の阿麻美許曾ハ天御
子許曾ハ下照姫の姫許曾ハ對へり如思ふ河内志
ハ在丹北郡南枯木村南天見丘二名阿麻岐志今称天
王と云る天見山又天岸の名何とりや床シ げるハ
神名式ハ參河國寶飯郡石座神社有を風土記ハ石座
神社所祭天稚彦也大寶二年癸寅九月始奉主田行神
事と所見たり思ふハ傳十九五百十一丁ニ廿二二百六丁ハ注る
ガ如く彼手力雄神亦名天石門別神と申すを又伊波
久良和氣命とも申せれば其御父神ハ就て由有を此

同郡御津神社を同記ハ御津神社所祭下照比咩也天
武天皇四年乙亥二月始奉主田加神社と見えて和名
抄郷名ハ御津美都と有る是なるを御津ハ難波の地名
を移せりと聞ゆるも攝津國其本なる事を知べし（下百伍十ハ云ふ）又
三代實録ハ貞觀十三年二月十六日授近江國正
六位上天若御子神從五位下と有を式社ハ見合す可
きなれも無を右の例ハ據れば滋賀郡石坐神社是なめ
り傳教ガ三津氏と云る出たるも今坂本の地名を
冒せるなる其ル右の御津の所以ハ同ト〻ル也を日
吉山王中七社の中ハ聖女宮と有ハ下照姫なるハも

思合す可あり此石座神社の事實ハ亘りて也天稚彦
が父天津國玉神ハ一も決く天年力雄神ハ坐す由ハ
知らるゝあり文德天皇實録ハ仁壽元年十月己亥朔乙巳進參
河國石鞍神授從五位下三代實録ハ元慶七年十二月
廿八日　授參河國從五位下石鞍神從五位上と見
元本國神名帳ハ正三位磐座大明神坐設樂郡と有り
民部式首書ハ延喜三年八月十三日割寶飫郡置設樂
郡と見ゆ式ハ同延長五年奏進の物なれども草稿の
時ハ未其郡を置れざりし以前なりしが故ハ寶飫郡
ハ牧られたりと或者も有り又從五位上石座若

御子天神坐同郡と有ハ右の石座社の末社兒御前社
是なりと云り然り時ハ右の石座神社ハ例の如く御
父石門別神なるべし石座若御子天神
と云ハ天稚彦ハ當れり然れども風土記の如くハ
石座神社御津神社ハ夫婦の神なりければ猶石座
神社ハ天稚彦なれ右なるハ其兒神なる可し偖此ハ
天稚彦ハ神とも命とも書されざりハ天神ハ敢けら
故なれば然も有るべを其父神ハ無ハ口惜き事なり
古事記ハ天津國玉神之子天若日子と有ぐ宜なる狀
なり○是壯士也ハ私記ハ壯士を盛人と注せれども
佐加理毘登とハ訓べうず舊くうず多祁伎比登と
訓られども上ハ謂ゆる天穗日命を神之傑也と有り
對あれば多祁伎迦微と訓べきあり然して言義ハ武
烈天皇前御紀ハ太子曰天下將亂非希世之雄不能濟

也能安之者其在連乎即與定謀と有て大伴金村大連
を斥て世ふ希れ〳〵る雄と詔へり雄を多祁伎比登
ふ用ひたるを同じ意なり万葉三三十五丁ふ物部乃臣之
壯士者大王任乃隨意聞跡云物曽と有る此ふハ壯士
を多祁袁と訓り十九四十一丁ふ韓國ふ由伎多良波之氐
可敝里許乎麻須良多家乎ふ二十五十丁ふ波自由美乎
多ふ藝利母多之麻可胡也乎多波左美蘓倍豆於保久
米能麻須良多祁乎〻佐吉ふ多豆由伎登利於保世山
河乎伊波祢左久美豆布美等保利久ふ麻藝之都〻知
波夜夫流神乎許等乎氣麻都呂倍奴比等乎母夜波之

波吉伎欲米都可倍麻都里豆と有るを多祁袁ハ勇士
を云り又其十八ふ伊田乎可比加弊里見世受豆伊佐
美多流多家吉軍卒等祢疑多麻比麻氣乃麻ふ〻〻と
有る軍卒も兵士を云るふて其義此の壯士ふ異なる
ざるなり多祁伎比て云ふて何れも同ト意なるが其中ふ軍
卒と云ハ其人〻を指ふて其任と爲り所を以て云るなり○宣試之ハ試給布倍
志登白志伎と訓べ上八十四丁ふ注るが如く天穗日命
ふ不可試歟と有ハ此任ふ當りてハ其神より外ふ任
給ふ可き神無〻と限りて申せるを此ふ宣試之
と云ハ此神より餘ふ遣す可き神の無ふハ非れども

先此神を遣して其消息を就て治め給ふ可しと次ぐ
危ぶむ意を含めり但然危ぶむ神をして遣はされむ
事を議奏せる事は如何なる狀ふは在れども未天穗
日命の復奏し給はざりし以前の事なれば未
此國の消息も詳らかざりし程の事なるが故ふ此神
を遣はされたる上ふて御め給ふ道は有るむと謀り
豫まして奏せるふて是思兼神の思慮の始終ふ宜し
きを得る所以ふるむ有ける但天稚彦然る不臣の神
可きふ非るを此國ふ降者て後ふ負氣無き心を起し
て返矢の御罰を得奉る可き者て知てはは如何ひりはは
遣はされど然れども彼因忠誠なるざりし事ふ依て
天地と常在ふ君臣の道の定れるば思兼神は始終の

宜しき所を測知て奏
されたるるけり　○天鹿兒弓及天羽羽矢は第一
一書ふ曰天鹿兒弓及天眞鹿兒矢と有り古事記ふも
故尓以天之麻迦古弓天之波羽波矢賜天若日子而遣
と見えて正書と異るざるが上ふ麻の言の副れる
を以て夫眞鹿兒弓天眞鹿兒矢と云べきを知べし然
して下ふ即天若日子持天神所賜天之波士弓天之加
久矢射殺其雉と有り此ふて弓を天梔弓と云ひ矢を
天羽羽矢と云事も知られたり此第四一書ふ大伴連
遠祖天忍日命中略背負天磐靫臂著稜威高鞆手捉天梔
弓天羽羽矢及副持八目鳴鏑又帶頭槌劒而立天孫之

前と見えたる此弓矢を古事記ハ取持天之波士弓
手挾天之真鹿兒矢と見え万葉二十五十丁ハ比左可多
能安麻能刀比良伎多可知保乃多氐理之須賣
呂伎能可未能御代欲利波士由美弓多尓藝利毋多之
麻可胡也弓多波左美蘓倍弖とも有て此二共ハ天羽
羽矢と天真鹿兒矢と云り右等の事共を引合せて記
傳十三十九丁ハ真鹿兒弓と波士弓と一ゆ〜て別物ハ
非ず波士矢と真鹿兒矢と一も〜て別あらず鹿兒と
ハ鹿兒を射る由ゆて弓矢共ハ其用を云る名波士ハ
本名波士ハ羽の狀ゆて此等ハ其体を云る名あり若

て此ハ麻迦古弓と弓ハ用の名の云ひ波士矢と
矢ハ体名を云て下ハ其を打飜〜て弓ハ体の名
矢ハ用の名を云る弓と矢と互ハ体用の名を差へ舉
て同物なる事を暗ハ知せたる古文の巧面白〜と云
わたるハ甚委〜き説ハ有けり然るを私記ハ或説云採天香山之
椿木造弓故謂之天鹿兒弓と有ハ甚心得ぬ事あり凡
て上天ハ材木を天香山ハ採せ給へりハ此椿木
をも天香山ハ採せ給へりき非れども其ハ就て天
鹿兒弓と号けしハ餘なる儳と云者なりけり記傳ハ
もこハ辨へられき猶天椿弓の事ハ第四一書ハ偖此
就て傳三十五卷十丁ハ委〜く注す可〜
天鹿兒弓と云事ハ古事記御呼國天降段ハ謂ゆる天迦久
神ハ天鹿神と云説有り記傳の右の續の右ハ鹿兒と和名抄

小鹿其子曰麑和名加吳と有て鹿の子を云ふ雖ども此
ハ唯鹿の事ゝ〳〵て其子を云ふハ非ず馬とも常ゝ駒
と云ひ猪とも韋能古と云と同例なり應神天皇十三
年御紀ゝ天皇西望之數十麋鹿浮海來之便入于播磨
鹿子水門云〻是以時人号其著岸之處曰鹿子水門也
凡水手曰鹿子蓋始起于此時也と有り是麋鹿の事ゝ
依て其處を鹿子水門と号と有ハ唯鹿とも鹿兒と
云證なり猪古ゝも猟ゝ小獸及鳥などを射るゝハゝ
さ弓矢を用ひ猪鹿など大なる獸ゝハ弓も大ゝ〳〵て
強きを用ひ矢も長きを用ひけむ故鹿兒弓鹿兒矢と

△猶播磨風土記ゝ揖保郡香山里条云鹿
墓
土下上所以号鹿來墓者伊和大神與國
之時鹿來立於山岑是忽似墓故号鹿
來墓土ゝ有も唯の鹿
と迦久と云ふ二證あり

云ハ大なる弓矢の称なり取要と云れたる是ゝて鹿兒
弓の說を盡されなり。猪斯る征伐の御使の表ゝ賜へ
る弓矢なれハ征戰の言を以号ふ可きゝ然らぬハ
如何と云ゝ常ゝ弓矢を用ふるハ山狩野猟をして猪
鹿を取をハ主と爲る事なるゝて征戰ハ背叛く者の
有る時ゝ臨ゝて用ふる物なるゝが故ゝ其常なる方ゝ
依て鹿兒弓鹿兒矢と云ふゝ有ける其名を定めて其ハ海宮遊行章ゝ兄火
闌降命自有海幸弟火火出見尊自有海山幸始兄弟
二人相謂曰試欲易幸遂相易之各不得其利兄悔之乃
還弟弓鞆而乞記釣と有て海幸の釣ゝ對へて山幸ゝ
ハ弓矢を云ふを以て弓矢の用の常を云時ハ猪鹿を
射取る爲なる事ゝ知べし○天羽羽矢ハ右ゝ擧たる如く天鹿

△継体八年十四年御紀ニ備前ノ志ノ矢ト訓ルモ猪鹿ト訓ル矢ニ志ノ字ヲ用ヒタルヲ若テ其ヲ

兒矢又天眞鹿兒矢と云て其說右ハ同ト羽羽矢ハ記
傳ハ羽張矢ハ絹布の類の幅を省て波婆と云ふ
同ト例ハ羽の廣く大なるを云なる可し と云れき
尾張風土記ハ種子命以三角石弓及玉太羽矢射殺佩
室臣と有る玉太羽矢と云ふ太羽矢と續けるふて羽
の太さハ其幅決めて廣る可く其を矢ハ作るもの
ハ其長決めて長る可ければ鹿兒弓の大なるハ合
せて其矢の度を云れば此の羽二矢の義ハ異なるべ
なるべし 備姓氏錄河內國神別ハ弓削宿祢高魂命孫天日鷲翔矢命之後也又
孫天毘和志可氣流夜命之後也と有ハ傳廿二 八十ハ六丁

注るが如く日鷲ハ光耀有る称なり翔矢ハ矢の捷く
翔行を云なるが出雲風土記ハ島根郡暗島の所ハ古
老傳云出雲杵築御埼有暗天羽羽鷲掠持飛來下略と
云事の有る天羽ニ鷲ハ右の說の如く天羽張ハて大
なる鷲の謂なる可し然る時ハ天羽羽矢ハ鷲羽を以
て作る矢なる事著明き者なりけり口訣ハ天羽ニ矢
作ニ羽矢於神代社納ニ羽矢と云るハ上代の制然も
有べきが羽ニハ二羽ハ非る事右の天羽ニ鷲ハ二羽
鷲なるを以其惑を解べきなり又其鹿兒矢と
云ハ就て或說ハ鹿兒之角無股故爲尖鏃以鏃名之弓

矢云鹿兒弓矢也魏志倭人傳云竹箭或鐵鏃或骨鏃云
々と云ふハ一應ハ然る事の如くなれども綏靖天皇
前御紀ふ乃使弓部稚彦造弓倭鍛部天津真浦造真鹿弭
鏃矢部作箭と有る真鹿弭鏃を麻迦古能夜佐伎と訓り
即真鹿兒矢の鏃と云事(ふて鐵鏃なる事云も更なり)あり若鹿角を以て鍛と爲る
なるべしふハ鍛部を以て作らしめ給ふ可くも非りけ
る者なるべしや又卜家說ふ天羽ニ矢ハニ羽ふ作るべ
有るべしと天真鹿兒矢ハ卜云ふハ口訣の說ふ同トけれバ然も
二尺五寸羽ハ鴉山雞又鷄ふて矢ハ皮剥が本式なり」
と云て羽ニ矢を鹿兒矢と別物ふ爲る事何れふし
ても信しがたし其外もろの故實々々種々の說を成
るハ中古々々出來れる者ふて皆右の類なりと知
べし但口訣ふ軍箭入時天鹿兒弓天羽ニ矢呪三度例

也と云事の有ハ然も有べし此事釋紀ふ引る天書ふ
乃授鹿兒羽羽曰此弓箭天之秘宝而可以隨身今人軍
功敵對獻臨戰時三呼其名而射之無不一當百矣と有
る可以隨身迄ハ天神々々天雅彦ふ仰給ひし御命ふ
て今人以下ハ其書を書うし頃の云習なり○賜ハ此ふ天稚彦ふ天鹿兒弓
天羽ニ矢を賜へるハ上百二十一丁ふ粗云るが如く此時
征伐の御使々々て天降し遣さる表物を授賜へる
なり此符信(しんし)を以て獻ふ示して證據と爲る事と所見
なり神武天皇戊午年御紀ふ長髓彦乃遣行人言於天
皇曰中略夫天神之子豈有兩種乎中略天皇曰天神子亦多
耳汝所爲君是實天神之子者必有表物可相示之長髓
彦即取鏡速日命之天羽羽矢一隻及步靫以奉示天皇

天皇覽之曰事不虛也還以所御天羽羽矢一隻及歩靫
賜於長髓彦ゝ見其天表益懷踟躇と有る文を
見る鏡速日命の表物も天神の授給へるるる故ふ
天皇の見行ー御在ー坐て實ふ天神ふ坐けりと所知
者ー明らめさせ給ひ次ふ天皇の天表を示ー給へる
ハ本ゝ申べき疑ハしき所非りければ此を見奉る
ふ及ひて踟躇ヵ奉れるるー然れば此ふ天稚彦ふ
弓矢を賜へりーも征伐の御使の表物ふーて國神と
ーて否ゝ距ぐ也ーもまぐる爲る事を曉る可ー記傳
ふも此事を書されて云く斯る畧ぬども天上の朝廷
のハ其制此國の尋常るるとハ遥ふ勝れて異るる狀

ふる有りーと云れたるハ然る言ふハ有れども其
元ハ天神ゝる賜へる表物と云事をば思落されなり
り其ハ崇神天皇十年御紀ふ以大彦命遣北陸武淳川
別遣東海吉備津彦遣西道丹波道主命遣丹波因以詔
之曰若有不受教者乃舉兵伐之既而共授印綬爲將軍
と有る印綬を志留斯と訓て軍防令ふ凡大將出征皆
授節刀と有る類なるが未此時節刀の御制無き以前
なるーるば何なるけむと熟思ふふ此時大彦命と叛
人埴安彦と挑河を中ふ置て挑戰ふ時ふ於是各爭先
射武埴安彦先射彦國葺不得中後彦國葺射埴安彦中
胷而殺焉と有る此を以て右ふ謂ゆる印綬ハ決くら

矢あり事明らかなり且軍と云も射合箭の義なれ
ハ此を賜ひて將軍と爲る事理に於て直ちに可ら
る事共なり此後の征使の度毎に弓矢を賜ふ印
綬と爲る事の見えざるハ定れる儀式なるが故に度
毎に注されざりしなり但此に天稚彦に弓矢を賜へ
りと云時ハ次に還さるべき經津主神武甕槌神も然
る御事の有べきか然るに如何と云に上に引ち
神賀詞に所見たる如く天穗日命と共に降給ひて大
己貴神を媚和し給へり其御子天夷鳥命を案内と
して降さるべき所なりけれ別に表物を賜ハせども
有り可く其上此二柱神の本分に貢と歛とを以て武
勇に御稜威を備給ふ神に坐せハ其ハ格別の事なり○此神亦不忠誠也ハ亦字
ハ天穗日命を忠誠なる神として其神に絶る義を

以て書れたるなれども其神の爲に甚味氣無き事な
る由上百二十に已に辨へたるが如く偖忠誠を此に
ハ麻米と訓り繼体天皇元年御紀に由是敬憚頭心委
命冀盡忠誠孝德天皇白雉元年御紀に公卿百官及諸
百姓等冀盡忠誠勤將事持統天皇五年御紀に以清白
忠誠不敢怠惰と有るにハ麻米碁許呂と訓り（下に謂ゆる眞心是なり）又忠の
一字を訓たるハ雄略天皇七年御紀に忠踰白日節冠
青松繼体天皇元年御紀に叛誠欵以國家世世盡忠持
統天皇四年御紀に尊朝愛國責己顕忠なるに見え續紀
第廿四詔に無諂欺之心以忠赤之誠食國天下之政者

△鏡速日命の其衆を卽て歸順ひ給ふ所ふ天皇素聞鏡速日命是自天降者而今果立忠効者矣而不離之心有之

衆助仕奉止宣第六十一詔ふも無詐欺之心以忠明之誠云〻助仕奉止宣あど有り是あり儲御紀ふ忠字を用られたる例神武天皇戊午年御紀ふ勅譽日臣命曰汝忠而且勇加能有導之功是以改汝名爲道臣（こと見えム）仲天皇前御紀ふ冀見得忠直者欲明臣之不欺允恭天皇七年御紀ふ既拒天皇命且亡君之忠臣是亦妄罪と有ふど〻ハ多陀志と訓ませたり又忠臣の字の訓の據是ふり又應神天皇九年御紀ふ武内宿祢歎之曰吾無貳心以忠事君今何禍矣無罪而死耶於是有壹伎直眞根子者（中略）便語武内大臣曰今大臣以忠事君既無黒心天下共知（中略）故今我代大臣而死之以明大臣之丹心あど有を忠字を都登米と訓り又古語拾遺ふも殺虜帥衆歸順官軍忠誠之効（其鏡速日命ハ御事を）殊蒙褒寵と見え孝德天皇前御紀ふ中臣鎌子連懷至忠之誠據宰臣之勢處官司之上と有るどハ忠誠又至忠を伊佐袁斯と訓り如此く言ハ所の狀ふ隨ひて異を物〻〻其麻米と云言の活機ある

△次ふ引る原氏物語ふ謂ひ

が如き者ありけり又續紀第卅四詔ふ先ふ奈良麻呂等共謀反乃事起天在之時仁方仲麻呂伊忠臣止之天侍都と有り忠臣を多陀志伎意美と訓れたるあり此を字ふ依て允恭天皇御紀の意を得て訓れた語第三殿ふ麻米袁登古と有を眞名本ふ緻夫と作り此ハ實人の義ある（ども 麻米意美 云言ハ非ト）其等ふ通ふ可し偖此麻米と云言を猶試ふふ帛木

十一丁ふ徒事ふも麻米事ふも我心も思得る事無く又
廿一丁ふ速無き徒事ふも誠の大事をも云合せたるふ
夕顔十六丁ふ斯る時筋ハ實人のの乱る時も有て甚目
易く鎮給ひて若紫十二丁ふ好き方ふハ非て忠や
うふ聞ゆるあうと推量ふ宣へバ紅葉賀三十一丁ふ實ふ
ハ乱給ハぬを忠やうふ寂しと思聞ゆる人も有う
葵三十二丁ふ世中の物語るど忠やうるをも例の乱が
ハしさをも聞元給ふ螢三十四丁ふ甚く忠立たる狀し給
へど猶可笑しく愛敬づきたる氣色のみ見元給へバ
野分十五丁ふ今幾干も御在せど忠やうふ仕奉う見元

奉れ槙柱四丁ふ大將ハ名ふ立う忠人の年頃ウうも乱
れたる振すい無くて又三十一丁憤うしき世の僻ありけ
りと忠立て侍るひ給へバ若菜下八十八丁ふ年頃麻米事
ふら徒事ふも召纏ハしく参馴つる者を幻三十ふ何ぞて
戯れみるも又忠やうふ心苦しき事ふ就ても推本十七
丁ふ泣き笑ひ戯事も麻米事も同ど心ふ慰め交し
て過し給ふ総角九十五丁ふ情深く無計き事ふも忠るる
方ふも想像多うる御志操を寄生七丁ふ此君ふこころハ
澁くるありとも忠ふ恨寄らバ終ふハ得辭び竟ど云
く中宮ふも忠やうふ恨申す事度重ふけれバ云し彼

大臣の甚忠立るゞ〳〵此方彼方義無く持成して物
給ずやハ有る又二十四二丁何事も疎〳〵ず兼〳〵もしく
う本意叶ふあてハ侍らめと忠立たる事共を聞え給
ふ又二十九丁云〳〵るどやうるる忠言を宣へバ斯る方ふ
も言宜きハ心著無く思え給へど又三十五丁然れど見知
ぬやうして甚忠るうる又三十九丁陸奥帝ふ引も繕ハず忠
立て書給ふ又四十一丁忠やうふ哀るる御志操の人ふ似
ず物〳〵給ふと云ハ心元無く甚遠くも侍る哉忠やう
ふ聞え給ふ兼らよ欲き世の物語も侍る物をと宣へ
バ浮舟二丁ふ人うるの忠やうふ愛〳〵も有〳〵哉と徒

る御心ふハ口惜くて止める事と又四十五丁忠人ハ閑
うふ見給ひつゝ哀如何ふ眺もゝむと想像て蜻蛉四十
四丁ふ忠人の然すがふ心留めて物語するこうしち
後れたゝも人ハ苦しけれ手習六十一丁ふ然る思すゝむ
と哀るるふも見る詮有べき御狀と思ハるーうバと
忠やうふ打泣給ふるど有る此等の麻米ハ強ふ忠字
の義るるつのゝふハ非ずめーて實字ふ當れるが多う
れども其本一るるふ心を著て味ふ可きるる右の如く阿陀
事と麻米事とを相對へて麻米と誠とを一ふ並べ又
乱るると忠やうとを相對へたる其交を見る可きるる
又麻米と深切るる意ふ用ひ又親ふ仕ゝ奉る事ふも
用ひたり神武天皇前御紀ふ大孝と親ふ從布と訓た

疎ことを忠立と
を相對

るハ更なり柏木巻二十四丁ニ親も仕へ奉りさしてと云ふと有れバ孝字をハ親字をハ従ふとも仕奉るとも云ハ然る物〳〵右の野分巻ニ依れバ親ふ仕ふるハも忠の言を以云べし強て君ハい麻米と云ひ親ふハ従ふとも云ふ限れる如くなるハ君忠父孝の字ふ泥める者ハ〻し古意ハ非ると見えたり

故其麻米の義を説ふ麻ハ眞なり若菜上十二丁ふ何事ふ就ても御後見し給ふ人有ハ頼もしげなり上を置奉りて又眞心ふ思聞え給ふ可き人も無れバ若菜下五十丁ふ女御の御爲の眞心なる餘ぐさと思ふふ甚難有けれバ推本九丁ふ眞心ふ後見聞えひるゝと思寄ふ聞ゆる有ハ不知身ふて許しても東屋十三丁ふ是ハ狀異ふ思初たる物ふ侍り唯眞心ふ思し顧させ給ハ

ぢ大臣の位を求願ひて」るゝと有る眞心を諸注ふ眞實なる心を云と云り又誠(マコト)ふと云ハ眞事ふて眞實なる事を云ひるゝふ就て思ふふ麻米ハ眞群(ニヒ)ふて歸順(ニツロハ)ふ眞列合なるふ其意相近さが其眞ハ本己が身体を云ふ起りたるふて麻都呂布ハ君上ふ其身体の列合て一ふ歸く意なる可く麻米ハ君上の御許ふ群纏ふ義ふて君臣一ふ成る謂より出て親ふ云も佗ふ云も其意味異なるゝぢる事右ふ注るが如く忠の言らり對へてハ徒(ミダ)とも乱(ミダ)とも疎とも相對へ云て其反語なるふ心を潛めて思ふ可き者なり然して其忠字の用法或

ハ正（タヽシ）と訓ミ或ハ勒（ツヽシ）と訓ミ或ハ功（イサヲ）と訓て凡人なる者の行狀ハ於てハ善事美事の至極あるが故ハ世ハ君上より重く嚴しく可畏く至尊き物ハ御在ー坐さりければ其ハ從事れるハ此忠誠（タヽメ）ある行狀を以て仕奉ル可き名稱とハ天津神隨ひて如此ある定まれる事なりけり此事を思ハずも長說ーてけり事ハ誰唯外見の形を以て從事れる僞忠をのみ知て眞實ハ其心より起りて止べきが故ハ今如此ハ云なり其忠誠の止ることハ至りてハ海行ハバ水漬く屍山行ハ草生す屍大君の邊ゆこそ死めさ身をも家をも顧無ハ生るも臣子と有り者の道なりけり猶上五十丁より六十丁ハ至る迄君臣の大義を說注ーなればハ其所ハ見合せ曉りて眞實ハーて正しき忠誠を盡す可ー○顯國玉ハ寶劒



出現章第六一書大國主神の御名共を擧ケる中ハ亦曰顯國玉神と所見たる是より古事記ハ此を大國主神之女と出たるを此ハ下照姬の亦名ハ稚國玉と有を載るハなる故ハ其ハ對ふる義を以て此御名を以書されたるあり但此神の御名の次序大己貴神（國主）と申すハ全体の御名國土を造固めさせ給ふハ依て國作大己貴神と申ー彼八十神の事故ハ遇て御父大神の御許ハ御在ーー程の御名（ハ渡らせ給ひ）ある事古事記ハ見え たるハ如ー八千戈神と申すハ八十神を言向させ給ひて後引續きて葦原中國の邪鬼を撥平させ給へる

時の御名ゐり顕國玉神と申す（大國主大神と御在ーし坐つれ）此時已か國土經營
の御功業を畢させ御在ーし坐て天下蒼生か專恩頼と
幸ハへさせ御在ーし坐す御名ゐて古事記ゐる御父大
神の御言か意礼爲大國主神亦爲宇都志國玉神と詔
給ひ依ーし給へりハ此御成業の御事と詔給へりられ
天神御子か國土を避奉りせ給へる以前の御名是ゐ
り神名秘抄か引り神祇譜天記か凡此神生子一百八
十一神以于五柱爲珍子而天下四方國人夫等令咸蒙
恩頼此之縁也と見えたる（此御子等ゝ天か恩か頼と幸給へりし事兼國玉神と御子の御名か見生ゝと也思ふ可し考異）五柱珍子と申せるハ地神
本紀か謂ゆる味耜高彦根神下照姫命都味歯八重事

代主神高照光姫大神命建御名方神の五柱か坐す事
傳サ九（ナ丁）か注ゐるが如ーし然れバ古事記か大國主神
亦名謂大穴牟遅神亦名謂葦原色許男神亦名謂八千
戈神亦名謂宇都志國玉神と有り次序の妙ゐりとも
妙ゐる事ハ今此を註すか至りて驚く（許計）ふゐむ御紀の次
序も右か同ト事を大國主神亦名大物主神亦号國作
大己貴命亦曰葦原醜男亦曰八千戈神亦曰大國玉神
亦曰顕國玉神と有て大物主神大國玉神ハ和魂神荒
魂神とハ此か挾て亦名の例か擧られなるハ非ゐ
れども其二神を除く時ハ
古事記とスクも異ゐるゝず○下照姫ハ古事記か故此
大國主神取坐胸形奥津宮多紀理毘賣命生子阿遅鉏
高彦根神次妹高比賣命亦名下光比賣命と有り是ゐ

り地神本紀ハ大已貴神先娶宗像奥都島神田心姫
命生二男一女兒味耜鉏高彦根神妹下照姫命と有ハ
右ハ合ると又次ハ次娶坐邊津宮高津姫神生二男一女
兒都味歯八重事代主神妹高照光姫大神命と有ハ重
復あり其ハ古事記ハ大國主神亦娶神屋楯比賣
命生子事代主神と別ハ出たる事あれども傳十三百五十
七十五二百三十四百九十三丁ハ注るが如く味耜高彦根
神ハ本体事代主神ハ和魂ハ坐て同神ハ渡らせ給へ
るが上ハ右の高照光姫大神命ハ古事記ハ高比賣
命ハ下光比賣命の本名あり此ハ亦名高姫と有て

下照姫命の別称あり又賀茂松尾の社傳ハ據る時ハ
其味耜高彦根神の別名大山咋神の御祖をハ胸形中
都大神と申して同市杵島姫命の御事あり如此く三
女神共ハ御祖ハ坐と云べき謂ハ無くして何れも一
方ハ誤れるるもと思ふ然ハ非ず大國主神ハ合
給へるハ三神一体と成て娶せ給へるなり(古事記ハ謂ゆる嫡后婚ガ)須勢理毘
賣命の御事あり又玉依姫命玉垂媛命眞玉著玉之邑
日女命由良比女命八野若日女命などと申すハ其三女
神を併せ奉る御名あるを思ふ可し然れども亦名ハ(各其)
ハ別神の如く傳ハ故ハ御祖神も御子神も皆別

こゝるが如く傳ハれり者なりけり 偖此下照姫命
の生坐しハ決く播磨國なりけり 風土記多可郡條ハ
黒田里云袁布山者昔宗像大神奥津島比賣命妊伊和
大神之子到來此山云我可産之時訖故曰袁布山と有
此ハ傳三十 百 丁ハ注るが如く大己貴神を伊和
大神と申して當昔彼國ハ御在し坐し程の御事なる
が其味耜高彦根神ハ出雲國神門郡ハ生坐りと聞ゆ
れバ其を除きてハ此下照姫命一所なる御在し坐け
る又高姫命と申すも其郡名ハ由有ハ上ハ次百四十 五丁
ハ云る伊和志豆神と申すも此神ハ坐るハ思合せ

て知るこゝなり 又云く支閇丘者宗形大神云我可産之
時訖故曰支閇丘とも有り 即和名抄郷名ハ多可郡黒
田と有る是なり 神名式ハ
同郡大津乃命神社見えたるハ右百二十六丁 洲天雅
彦が事ハ就て云る如く御津神社の事ハ合せて此神
を祀れるなる可きハ思合す可く又加都良乃命神社
と云も有ハ天雅彦を祀れる なる可く思ふ由有て已
ハ傳三十 卷ハ云り 下照姫と申す名義ハ允恭天皇七年御紀ハ
弟姫容姿絶妙無比其艶色徹衣而晃之是以時人号曰
衣通郎姫也と有る義なて艶色の身外ハ晃度れる謂
なる可し 万葉十八 十二 丁ハ多知波奈能之多泥流ハ波
ハ等能多豆天佐可弥豆伎伊麻須和我於保伎美可毋
十九九ハ春苑紅ハ保布桃花下照道ハ出立嬬嬬など

此ハ花の氣韻（ニホヒ）の其薩ハ滿たるを云るれども下照の意ハ此ハ同じ又下照の語を轉して志度理とも申しけるもや神名帳ハ謂ゆる伯耆國川村郡倭（ヒドリ）文神社を一宮記ハ下照姫命（ヒメ）と書せるハ中世ハ推當たる者ゑる可く思ひしるべ然ハ非ず大同類聚方ハ○倭利藥伯耆○國川村郡倭文神主之家方冠原者下照姫神方也と有を以て其僞ゑるべきを事知られたり然れば三代實録ハ元慶七年十二月廿八日庚申授伯耆國正六位上天照高日女神從五位下と有る天照ハ下照の義ハて久米郡倭文神社のゝ神階ハ漏たるハ其社の御事

ある可き由傳三十（百）十（百）丁ハ已ハ注るが如く氏理ゝ登理ゝ通ふ由ハ右（百十二）丁ハ注る武日照命武夷鳥命の例ハ思合す可し又倭文を志豆とも云事常ゑるハ就て又思ふハ神名式ハ攝津國武庫郡伊和志豆神社大月次ゝ新嘗有も伊和ハ右ハ云る伊和大神（ゆゑ御父大己貴神）の御事ゑるり志豆ハ倭（ヒドリ）文ハて右の例ゑる可きハ因幡國高草郡伊和神社倭文神社相並べる如く此も御父子相並ばせ給へるが一神の御名の狀ハ見ゆゑるる可き事其も傳三十（百）十丁ハ云り右等の倭文も志豆も下照の轉語ゑるハて此下ハ謂ゆる倭文神建葉槌命の倭（ヒドリ）文ハ

後取の義あるあて等しうさわば（其と此と）此を混同ふ思混
ふ可うう〳〵ず記傳廿一卷五十八丁ふ下照ハ鄙照の
類の称名ゝ又容貌ハ美麗しきを云ふ云
こと云れたり第一ノ一書下照媛の歌ふ阿磨佐箇屢遊
奈莵謎能ハ天放有鄙女之ふて鄙女ハ已命の事を詠
給ひしふて御祖神の事を天在也棚機之と語給へ
るふ對へて國神の女なる由と宣へらるしば下照を
鄙照とも難云き様あり故今ハ容貌の美麗しきを云
と有る方ふ依て説と成しつ實ふ鈴屋大人の賜物ふ
り○亦名高姫古事記ふハ高比賣命亦名下光比賣命
と有て御本名あり然して此の所を要大國主神之女
下照比賣と有て其下なる阿治志貴高日子根神ふ對
へたる所ふ其伊呂妹高比賣命と有り傳十五三百九十
一ふ注るが如く出雲風土記ふ神門郡多伎郷郡家南

△此神菅山真龍説ふ下照姫命と定めたるハ然ら言ふて

△出雲神賀詞ふ謂ゆる賀夜奈流美命と申せし此神ふて高屋在せ命と申田あり傳十九百飛鳥神社の所ふ注するが如一倍

西廿里所造天下文神之御子阿陀加夜努志多伎吉比
賣命坐之故云多吉神亀三年改字多岐と有る阿陀加夜努志ハ
大高座主ふて天下作しし大神の公主ふ坐ふ故ふ御
舍を高知り御在し坐す事ハ申さる更なり高樓を作義なる可く多伎吉ハ高城ふ
て其外郭を云なり下照姫命と申し高照光姫命と申
す御名の出る所此ふ在べきなり神名式ふ神門郡多
伎藝神社と有ハ其姫神ふ御在し坐なる可く又多伎
神社同社大穴持神社と有る此三社を合せて今多岐
村三社大明神と申すと云り其多伎神社ハ御祖高淵津
姫命ふ渡しし給ふ可き事申すも更なり又御祖と神屋楯比賣命

と申す、神屋建姫命と申す事あるが同記に神門郡高岸郷云々所造天下大神御子阿遲須枳高日子命甚晝夜哭坐仍其處高屋造而坐之即建高橋而登降養奉故云高岸と有り高屋も右の阿陀加夜に由有り考合す可

偖此高姫命と申すハ御兄味耜高彦根神を出雲風土記に阿遲須枳高日子命と有る高日子命に對へなる御名にて天下造らしたる大神の珍御子にて御在坐す謂る者なりけり又右に注る如く地神本紀に高照光姫大神命と申す大神ハ例に違へハ姑く此を衍として高照光ハ多迦氐流と訓べくして下照姫命と申に異なるべき事右に云る如く下照ハ上より下を照す意高照ハ高きより低きを照す意なると

合せ思ふ可なり又天照高比賣神と申すも天照皇太神に由有る神等にハ天照御魂神天照御門神なども上に冠て申す例なれども其とハ別にて此ハ高日女神の上に右の高照の言を冠べき所なるを高照高姫神と云重復て云はるる故に天照と置るにて天上を照す義に非ず其御光の麗しきが虛空に曜き給ふ義なる可く所思元たり因云地神本紀下照姫命の下に坐倭國葛上郡雲梯社と有ハ神名式に大倉比賣神社一名雲梯社と有り是なるが此神名の大倉ハ古語拾遺朝倉朝段に諸國貢調年々盈溢更立大藏と有に等しく

所造天下大神の御倉を主らせ給へる謂なる可し又
高光照姫大神命の下に坐倭國葛上郡御歳神社と有ハ
神名式に葛木坐御歳神社名神大月の主神ハ傳廿六
百丁に注せるが如く大年神の御子御年神に渡らせ給
へるが農作の事に御力を合せ給ふ由有て其從祀と
成らせ御在し坐る可し然して此神を亦次百五十一丁に注るが如く飯豊
命と飯豊比賣神とも申せるハ食物の事に幸給へ
る由なるを合て其御歳神社に御在し坐す所以を
も合曉る可きなり若し其大倉比賣神と申すも愈大
に所以有る事右に注る事共を合せ曉考ふ可き事な
り

○亦名稚國玉八上野國神名帳に碓氷郡從四位
上若國玉明神と見えたるのみにて他書に見當らず





偖御父大神の顕國玉に對へて稚國玉と申せるハ國
土に甚しき御功神なりけり右百四十丁に引る神祇譜
に凡此神生子一百八十一神以て五柱爲珍子而天下
四方國人夫等令咸蒙恩頼此之縁也と有る其五柱珍
子の中に御在し坐て御兄味耜高彦根神に並ばし
高姫命と御名に負し給へる實に次縁の神なり
ハ御在し坐ざりけり記傳十三巻廿三丁に柳下照比
へて稚國玉てふ名を負たるハ女神なれば父神
賣ハ父神の御名の大國魂に對
と輔けて國經營に大なる功ありけむ然れば當時咸
勢も有けむ故に今天若日子此國を得むと欲ふ心り
く此神をも要けり」と云れしハ然る言なり其事ハ
次百廿丁に云べし○下照姫命の事跡ハ傳世巻大己貴神及

御子神等共ニ國土を巡造らせる因ニ云ふと今其神
を祀れる社とを又も注す可し神名式に大和國高市
郡飛鳥坐神社並名神大月次相嘗新嘗と有る此社に傳三十百十十
丁に注せるが如く事代主神を祀れるなりを出雲神
賀詞に賀夜奈流美命能御魂乎飛鳥乃神奈備に坐天
と有て御父大神の國避の御時に皇御孫尊の近守神
と鎮め置聞えさせ給へるなるが此神を下照姫命に
なりと云ふ社説に四座事代主命建御名方命高照姫
命下照姫命と傳へて此一神の御名を二柱に称別て
高照姫命下照姫命と並祀れるなり若て賀夜奈流美



命に負觀十六年格に賀夜鳴比女と有て美に女神の
謂なり然れば賀夜奈流は右百四十六丁に云る阿陀加夜
努志多伎吉比賣命の御名の略めて高屋在の義なり
可し但高の多と省く例無しと訝る人も有り若
然らば御祖神屋掩比賣命の御名に神屋を建させ給ふ義に
れば此は其神屋に住給ふ謂なるを以て神屋在女命
と見ても其大高屋主の事に於て吹らも違ばざるに
りけり又同郡加夜奈留美命神社と有は同ト御魂を
其別社に祀れるなり此並に飛鳥川上坐宇須多伎比
賣命神社と有は其御祖高津姫命に渡らせ給ふ事傳

廿九 百 十 丁ハ注ヲガ如シ右ハ引ク格文ハ飛鳥神之
裔天太玉臼瀧加夜鳴比女云ヘト有リ裔ハ子孫ノ義
ハ非ズ別宮ハ社ノ謂ある者あり三代實録ハ見觀
元年正月廿七日甲申奉授大和國從五位下賀夜奈流
美神正四位下ト見ヘたり大和志ハ在栢森村今称葛神ト有リ已先年ハ詣奉リ
けるハ御社甚く衰微させ給ひて或寺の傍ハ祠有
を其葛神ありと祀れるを見奉れり甚淺ク〳〵なれども
云ヘバ更ありト臼滝社ハ其〳〵一二丁上方ハ立せ御
在ー坐て今宇佐宮とハ申せり此も森も未深くして
神進たる御社河内國河内郡大津神社丹比郡大津神
ハるひ有けり
社三座鎌倉と有ハ傳三十 百 十 丁ハ注リ如く播磨國多
可郡加都良乃命神社大津乃命神社と並坐ハ天稚

彦と此神とある可く思ゆ其大津ハ難波の御津を以
て神名ハ負せるなめり然ーて若江郡加津良神社
丹比郡阿麻美許曽神社鎌倉敦見ヘたるも曲有リ事上百二
十六 天稚彦の條ハ注リ事共を思合す可ー其河内郡大津神社
丁
と河内志ハ在水走村と云リ又津原神社志ハ在市場
村津原沉側今称玉串明神有古哥ヲ云ひ掲無神社を
志ハ在汐万寺櫻井邑今称船山明神社也有地名掲無
と有リ此ニ社も曲有ケ有リ其丹比郡大津神社ハ志
ハ在丹下宮邑今 攝津國東生郡比賣許曽神社名神大
称大宮ト云リ
月次相
嘗新
嘗 臨時祭式ハ比賣許曽神社一座亦号下照比賣と見ヘ
頭注ハも比賣胡曽下照姫と有リ當郡難波坐生國魂
神社二座並名神大月次相嘗新嘗ハ御父大神ハ渡リ給ひ阿遊

速雄神社ハ風土記ニ謂ゆる味鉏山にて味耜高彦根
神の古跡なるに頭注にも高鴨明神也味耜高彦根命
と有て御兄神なり又万葉三二十二丁に久方乃天之探女
之石船乃泊師高津者淺水家留香聞と有て天稚彦に
も由有る地なる事上に注るが如くなれば下照姫命
を祀れるハ此に勝れる社なるべし無りけり垂仁天皇二
年御紀に謂ゆる比賣語曾社と（同名なれども混ふべからず）別なり神階ハ三代
實録に貞觀元年正月廿七日甲申奉授摂津國従五位
上下照比賣神従四位下と所見たり又同社の社記に
崔宮神社祭神二座別雷命飯豊命（下照媛別称也）勸請奥州白

△東生郡豊津掃生の社傳に往古下照姫命と上社に一其後二社を遥営り一雅日大寧月讃尊と中社に輌遇突智命と下社に一て三社に斎祀ると云りも下照姫命と奉ると爲るなるが御歳神に中首の事此にも思合す可一

河郡仙谷郷兵と有ハ右の比賣許曾神社の別社なる
が別雷命と申すハ味耜高彦根神にて御在一坐す由
傳廿六百丁十に注せるを神名式の陸奥國白河郡都
々古和氣神社名神大も其神にて渡らせ給ひ飯豊命ハ（下百七十五に注す可一）
同郡飯豊比賣神社有る是なり即下照姫命の別称な
る時ハ右百四十七丁に注せる大倉比賣神と申一又御歳
神の従祀と成らせ御在一坐す事克合りと云べ一又
右百四十五丁に注る武庫郡伊和志豆神社大月次新嘗と有も
此神に坐らせを三代實録に貞觀元年正月廿七日甲
申奉授摂津國従五位下伊和志豆神従五位上と見え

たり垂仁天皇御紀ふ見えたる比と同じくさら由ハ古事記ふハ此者坐難波之比賣碁曾社謂阿加流比賣神者也と見えたる式ふ謂ゆる住吉郡赤留比賣命神社是なり比賣許曾と云ハ姫社と云事ふて姫神の住せ給ふ社の謂なり神名ふてハ非ず

伊賀國山田郡鳥坂神社ハ

鳥坂を誤れるなり可―伊賀國名寄と云物ふ山田郡鳥坂明神ハ鳥坂の里ふ坐す」と云ひ伊賀考と云物ふも鳥坂神社延喜式伊賀廿五座の内下照姫命なりと云ひ又或説ふも鳥坂神社今阿拜郡鳥坂村ふ在り昭子内親王哥ふ祈りとも詮こゝ無けれ獨子を何時も宇佐加の神垣の内」と詠給ひ―是なり」と云り右の如く諸説合り上ハ鳥を宇の假字ふ用いたる例ハ佗

ふ見當らざれども猶宇佐加と云べきなりけり次ふ云ふ越中國新川郡鷄坂神社の所ふ云事有を見合す可きなり又風土記ふ山田郡山田山略中有神日事代主命亦曰河田明神磯城津彦玉手看天皇御宇之時奉崇之國郡皆倣之と有り此ハ式外なれども御兄ふ坐を式ふ同郡阿波神社坐ハ其后神阿波咩命ふ坐て謂ゆる天津羽羽神の御事なり此を伊賀考ふ在下阿波杉生大明神と云り右の越中國ふ杉原神社鷄坂神社相並給へるを以思ふ杉原ハ杉生と訓べきなり和名抄摂津國練東生郡味原を万葉六十四ふ味經と作る例も有れ

△下百六十三丁見合す可し

△文德天皇實錄ハ仁壽元年十月己亥朔乙巳參河國御津神授從五位下と見えたり

ハ其も阿波神なる可くして由有げなる事共あり味稚高彦根神事代主神ハ本なり一神なりて御在しなが其阿波神ハ天石帆別神の御女天津羽々神なりして天稚彦の兄弟なり△參河國寶飯郡御津神社風土記ハ御津神社所祭下照比咩也天武天皇四年乙亥二月始奉主田如神礼也と見え和名抄鄕名ハ御津美都と有ハ難波の御津の地名を移せる事決さを同郡石座神社ハ天稚彦を祀れる事上百二十六丁ハ注れば其所以有を思ふ可し△本國神名帳ハ正三位御津大明神坐寶飯郡と有り大同類聚方十ハ毋良世藥參河國寶飯郡御神社傳方御之里村瀬貫名之家之藥也と有ハ御津神社御津之里と有けむを二共ハ津字を漏せるなり御父大神ハ醫藥神ハ坐せるなり此神ハも然なる御功坐るなりけり此社今御油驛の東南國府の南三津村ハ在て舟洲明神と申すと云り三津をハ美登と今唱るハ和名抄ハ美都と有を訓誤りたるなりの事なるべし羽田野敬雄と云人の說ハ今御津莊廣石村ハ在て御津大明神と云ふ其御津と云ハ廣石茂松森下西方平野大草赤根七村の總号なりて御津七鄕と称す然れど佗なりハ廣石を指て御津と呼馴來れり」と云り三川國二葉松と云物ハ御津湊始孝元天皇行幸當國之日奉寄鵜首於此津因此号御津湊と有り古風土記なるべしの文ハや伊豆國賀茂郡大津往神社ハ右百四十ハ丁注るが如く播磨國多可郡大津乃命神社と有と同ド書体ハて往ハ伊奴の略訓奴なるを轉して能の假字

ふ用ひたるふやう伊豆志ふ當郡手石村ふ坐すこと王子宮とも云ふ三島の森と相對す三島神の御子なるら也と云り其三島大社ハ傳廿九百十丁ふ注るが如く事代主神ふて渡らせ給へれバ其近きふ御在ー坐す事實ふ所以有ことろ思ゆれ又同郡伊波久良和氣命神社伊波氏別命神社穗都佐氣命神社田方郡引手カ命神社劔刀石床別命神社ハ天雅彦の父神ふ坐ー那賀郡石倉命神社ハ右ふ謂ゆる參河國石座神社の例ふ依れバ天雅彦なること又田方郡倭文神社も伯耆國の例を以て下照姫命と定むも可き狀あり飛彈國大野郡水無神社を一宮記ふ大己貴命兒御歳神と有り然れども御歳神ハ大己貴神の御兒ふハ坐さず大歳神の御兒ふ坐す事傳廿六百十丁ふ注るが如ー頭注ふ水無大己貴命女高照光姫命母高降姫大和國葛上郡御歳神社同之と有ハ右百四十七丁ふ引り地神本紀の信ふて信ーこと思ふ人も有ふめども已ふ大同類聚方ふ飛太藥天野郡水無神社御歳祝之傳方云ー大己貴命所授也と有るど殊ふ古き事なるハ御歳神と共ふ農作を弘め給ふ御功坐ず故ふ何方ふても御歳神と下照姫命とハ一ふ御在ー坐るなりけり偖水無ハ實成ふて稲穀を作給ふ由なるが三代實録ふ貞觀十二年十二月八日乙酉勅分飛彈國大野郡爲西郡と有を大八洲記ふ引て延喜式舊本首書云割大野郡

置溢田郡と有り和名抄郷名ハ當郡益田萬之田秋秀阿伎比天と有る一ハ稲穀を殖る地を以て名と一ハ其田地ハ熟り所の秋穎を以て名と爲るなど古ハ此神の農作を弘め給へり一地なる證是なり然して荒城郡大津神社荒城神社見えたり（八三代寶龜ハ貞觀九年十月壬申飛彈國從五位下大津神荒城神並從五位上ノ有リ若ハ）大津神社ハ右ハ往〻注るが如く同ど下照姫命ハ渡らせ給ひ荒城神社ハ和名抄郡名ハ荒城阿良木郷名ハ同郡荒城と有る地ハ坐す神と聞ゆるが飛彈志ハ里氏の説ハ古昔荒城郷の主たる人城荒らと云字を忌て吉城と改たり」と云て今唱るる所ハ荒城郡の名ハ無して吉城郡なるハ就て説有り天稚彦ハ殯斂の所を御紀ハ天上と爲るハ誤るるハて古事記の如く此國ハ在と爲る時ハ其殯斂の地なる事決き狀なり万葉三五十ハ左大臣長屋王賜死之後倉橋部女王作歌一首太皇之命恐大荒城乃時ハ波不有跡雲隱座と有る荒城是なり又和名抄郡名郷名ハ當郡名張遊部阿曾布有る其名張ハ伊賀國ハも有を天武天皇御紀ハ隱字を用るれなる其意ハて天神ハ憚奉れる謂なる可く遊部ハ喪葬令ハ謂ゆる遊部なるを釋ハ遊部隔幽顯境鎮山瘞魂之氏也と有ハ後ハ職名と爲れるを云るれども已ハ此ハも八日

○同志ハ荒城神社ハ古城郡宮地村ハ今ハ荒城宮河伯大明神と稱す里人云く北山澗ハ蛇が尾と云所有り古河伯神出現の地なり」と云る飛單ハ半ハて舟の往來ハ地ハ非ず蛇尾の地名岩蛇なるの地ハ國しる者と見ゆ但河伯神と云ハ後世の俗称ハて取ハ足ずと雖も下三高さハ三尺ばかりなる石河竹淵と詠るハ此を指なり見れば其荒城神社と河伯大明神ハ申すも由有り

八夜悲歌ス有れバ此ニ起れり作法あるかも思合
せられ其田喪屋を斫仆して蹶離遣給ひ喪山ハ南
ニ隔れり美濃國ニ有り其歛を神度歛と云ハ神名式ニ
越中國新川郡神度神社思めりしを其ハ此ニ接け
る國なるかも思合せられ就て荒城の古名と
て吉城と改唱へしハ古くより國人の私称なりし故
ニ何時と無く吉城郡の名とハ定れるが有べし
けり又天探女の事ハ耳寄て聞ゆる事有り飛彈志
ニ森八幡宮在益田郡下呂郷森村里人云當社八
幡宮ハ古昔同郷湯島村ニ在しを後世此地ニ近す此
を田神祭と称して本土古來の祭祀なり和漢三才圖
會第三曰飛彈國明神社在益田郡松森村俗云志也具
之乃宮道祖神也と云り按ニ本土ニ於て今松森村

真田下二百九十五ノ注ノ可ニ考ヘリ

并ニ志也具之乃宮と称す神号無し疑くハ此祠
なる可きか八幡迄宮ニ先立て志也具之乃宮有しニ
併祭しを後世ニ至て志也具之乃神の号ハ廢して田
神祭と称す神祭ハ傳来れる者か或曰志也具
之乃宮ハ道祖神道守神幸神岐神とも云ふ各同神ニ
して猿田彦命なりと云り又此祭礼と云ハ正月十日
氏子の村童十二三歳なるを集め神前ニ於て鬮を取
しめ十人の數と撰出て此役ニ充つ其中より一人を
抽て祢宜と号け折烏帽子直垂を著し當日の祭主と
して古より行の詞と云有し祭主此を神前ニ於て唱へ
細き竹を長二尺一寸ニ切て携持て已以波之と云行
終りて群集の中へ投出す拾得る者ハ此を喜瑞とす
其余の九男ハ舞踊を役とす踊歌の章句有り其装束
ハ茜染の木綿を著して帯一筋を肩ニ掛け脇下ニ結
下て筋と爲りを襷と云ふ花笠として赤白黄色の紙ニ
て拍り是稲を束たる狀と云ひ又笠の縁ニ三色の紙
を切割き下りを稲穂の狀と云り此笠を被り竹篠を
摺り哥を謡い踊れり囃す者ハ笛大鼓ありて此神
事ニ預る輩ハ甚清浄を第一として國中の民毎歳此
を歛さず當日の神具七品神輿一輛木獅子一頭旗八

本劍一振弓二張鋒二本鳥毛鎗一本也と云事有る志
也具之乃神ハ探女神と記れると見えたり其道祖神
と云ハ傳十二卷六十三丁ふ注るが如く然り鬼物ハ
岐神の御制を仰奉り居る者なれば其神ふ屬て祀ふ
享る事ふて右の祭祀の狀も田神祭と爲る歟却りて
後ふて全くハ御靈會などの類なり其中ふ稻を用ふ
るハ大殿祭詞ふ謂ゆる東稻めて鬼魅を逐ふ上古の
狀なり又八幡宮と申すも八衢神より起れる事なる可
けれバ志也具之宮の一名とも云べし上野國那波郡倭文神社ハ右百四十万五
丁ふ注るが如く下照姬命ふ坐る可しや和名抄郷
名ふ委文之止利と有り是なり三代實録ふ貞觀元年八
月十七日庚子上野國正六位上倭文神列于官社同廿
日癸卯授上野國正六位上倭文神從五位下と見え本
國神名帳ふハ從一位倭文大明神と出せり此御由緣

の事共ハ傳十五四百十卅十丁百一丁ふ引合せ見る可し
同帳ふ碓氷郡若國玉明神ハ已百四十七丁ふ注せるが如
く此ふ下照姬命の亦名高姬亦名稚國玉と有れハ疑
ふ所無く其神ふ坐す事申すも更なり下野國河内郡
二荒山神社名神大ハ一宮記ふ味耜高彦根命と有る即
宇都宮是なり此同社二荒山ふ御在し坐て三社なり
本宮をハ與宇都宮同体味耜高彦根命新宮大己貴命
瀧尾下照姬命と傳へて俗ふ謂ゆる日光三社是なり
此を宇都宮と申すハ大己貴神の珍子の宮と云意ふ
て申傳たる可き事右百四十一丁顯國玉神の所ふ引
る神祇譜ふ依て明らむ可し陸奥國白河郡飯豊比賣神社ハ右百五十一

又同郡雀宮驛ふ雀宮大明神と申すハ名高こそ堀津國雀宮ぞ其所ふ紀等しく可くこそ

丁ふ引ら豊比賣許曾社記ふ下照姫命の別称を飯豊命と申して當郡仙谷郷より攝津國崔宮へ勸請れる趣あるを以て其本社たる事知られり此社今も飯豊村ふ坐と云り又加美郡飯豊神社觀跡聞老志ふ石神社在ふ野田本郷有巨石長五尺濶四尺方三間郷人誤爲飯鳥屋神社と有り石神ハ石舩の類と聞えたり又安積郡飯豊和氣神社紀略ふ寛平九年九月七日己卯授陸奥國正六位上飯豊別飯豊和氣神正五位上と見ゆ土人今飯盛山妙見社と云と云り但此ハ其夫天稚彦ある事有べし傳卅九ふ云り又和名抄宇多郡飯豊郷有り會津郡ふ飯豊山と云有も決く此神下照姫命ふ由有る地と思ふなり偖飯豊と云ハ字の如き意ふて食物を多く積畜させ給ふ謂ふて右百四十七丁ふ注ら亦名大倉比賣神と申すと同義ある事云も更あり又名取郡佐具敵神社ハ天探女ある可く思ふと風土記ふハ高皇産靈尊と出なれば此ふ由無きと其並ふ玉島圭田五十九束三字田所祭下照比咩也天武天皇三年甲戌三月始奉圭田行神礼と有れば此ハ式外ふて舊社ある偖傳十二百十卅百丁ふ引ら出羽國最上郡の古老の傳ふ古出雲國ふ阿古夜と申せり姫君有り陸奥國ふ藤と云男有と聞く其とり吾妹と定む可きなりとて

來給ひしが置賜村山の邊ふ川有り渉渡り爲給ふと
て裙を高く褰ければ其脛白く水ふ移れるを里人の
見て笑ければ耻給へるより耻川と云名遺れり若て
室澤と云ふ山内ふて終ふ其藤と夫婦と成て或時二
人下江と云所へ出けるふ大水溜有と雖も連山相重
りて下ふ流るゝ事能はず此ふ於て人夫を促がし其
山を切流せりしが水勢甚鼻くして悉く流落て唯最
上の内ふ長泥泥澤蟹澤と云所ふのみ水殘りて太抵ハ
平地と成れり其地今最上郡と云る是あり其水の流
ハ謂ゆる最上川是あり其山を崩し入たる土砂も亦

國と成る今莊内の地是あり」と有り阿古夜ハ右百四十六
下ふ注る阿陀加夜努志多伎吉比賣命の御名ふ似著
しければ其藤と云ハ天稚彦の事を誤傳へたるもの
然して其置賜郡と會津郡と越後國蒲原郡とふ跨れ
る飯豊山ハ此下照姫命の御名を負るゝど必神世の
古跡甚著き者ふあり有けり但右の如くハ天稚彦も
國作の事ふ功用有る狀
あるあり其ハ古事記ふ於是天若日子降到其國即娶
大國主神之女下照比賣亦慮獲其國至于八年不復奏
と有る其間の事るめり本より此國を獲むと思ふ心
有しゝ國神と共ふ其功業を輔け成せりけむ事云
も更あり
故其下照姫命を飯豊命と申奉る事右の如
くあるが皇極天皇三年御紀ふ休留休留芽鳩也産子於豊

浦大臣大津宅倉と有る通證ふ蒼鴟ハ和名抄鵂鶹の下ふ漢語抄云以比止與と有る是あり通證ふ言響之義其鳴聲似人語今所謂布久呂布也と有て言響の義と〳〵て何の事も無れど若くハ此神の令使給ふ鳥ふ〳〵〳〵其御名を負るゑ〳〵〳〵其ふ就て一の臆說ふむ出來れる陸奥國の渡島ハ〳〵も此神の開ゆせ給ふふハ非らり其島ハ傳七ナふ注せり八洲四神起元章ふ謂ゆり蛭兒是あるが其古傳ふ古昔此世ハ大るり海原あり〳〵其氣凝て清き物上りて青空と成り重く穢き物漸凝て一島い成り其島日ふ增〳〵大きく成て

山の狀と成る是今の志理倍郡山の峯あり其所へ造島神と云て一人の神出來り此山ふ住給ふ時ふ青空〳〵り一神五色の雲ふ來り降來て其青雲を山ふ蒔て草木と化〳〵黑雲を海ふ投入て巖と成〳〵其間合ふ黃雲を投込て土と爲〳〵廣げて國と成〳〵給い其赤雲を此國ふ蒔散〳〵て金銀珠玉珍寶と成れと祈給い白雲を蒔て鳥獸虫魚等生有る物と成れと海ふ投込て殘の雲ふ乘て人間地の神の在る所へ行て二人共ふ神と成給ふ其神ハ空を飛行〳〵給ふ事自由あるが故空中を照〳〵歩りせ給ふ云〳〵と云るハ二柱御祖神

の古説あり又云く其後此國草も木も有り鳥獸魚も有りしかども人種未非有りける時京都より一人の官女種々の手箱を空舩に積て佐留と云海岸へ流著き其窟に入て居給ひしが行器耳盞貝桶等を入て來給ひしが食物を盡して飢に及ぶ時山より犬一足來り種々の食物を與へ養奉りしが後其姙懷妊して子十二人を生給へり是島人の始なり然るに其子供は誰を夫とし誰を妻と爲と云事も無して在る間に雌雄の鵠飛來て交合の事を成けるを見て交合の道を得て其出來る子供四方の場所を開き漁を業と爲る事

を得たり所以に鵠をば迦牟伊知迦布と云て島人此を見る時は甚く尊敬へり云々と云る官女と云は此姫神を御在し坐し傳を亡ひて人間の狀に云るなる可く犬は其使ハせ給へる畜なる可きを島人の祖先の如く傳訛りたる可し然して右の鵠を神鳥と（島人に人倫の道を教給へり）して敬畏るは此島を經營給へり飯豐命の御名を負る鳥なるが故なる可くと思ハる△又一傳に其造島神其山を始作給へる時何國とも無く雌雄の鵠飛來りて二神の御前に交合の事を成けるを見行して夫婦の御契り出來れり所以に迦牟伊は神と云事知迦布は鳥と云事なり造島神の御代に此島に住る鳥なりけれバ夫婦の道を教へし鳥と成て島人此鳥を見る時は甚く尊敬ふ云々と云り此は八洲起元章第五

△島中所々に辯天社と云多き由なり其神は其方の人の女神なる由と聞て然称たりけるなるべし

一書ハ遂將合交而不知其術時有鵠鴉飛來搖其首尾
ニ神見而學之即得交道と有り傳と後の鴉とそれ一
訛傳なり一者なる可し右の志理倍都山ハ齋明天皇
五年御紀ハ謂ゆる後方羊蹄岳なるが後方邊と云事
ハて皇國の後方なる邊僻の極なる謂なる可し右等
の傳共ハ伊勢國人松浦ガ公用ハて彼國を巡見
けるに共ハ夷人共なり正一
聞なる日記なるなり得なるなり若狹國遠敷郡石按比古神
社國帳ハ從四位石椋彦明神と有り又一正五位石椋
彦明神と云も有り上百二十六丁ハ注さる參河國石座神
社の例ハ據る時ハ天稚彦を祀れるなるめり然れバ其
ハ並へる石按比賣神社ハ下照姫命なる可し國帳ハ
ハ正五位石椋姫明神と出たる當郡弥和神社阿奈志
神社ハ大物主神大國魂神ハ坐れバ此女神ハ由有る

事論を待ず越前國敦賀郡大椋神社右百四十七丁ハ注る
大倉比賣神ハ思合す可し三代實録ハ元慶四年九月
十七日授越前國從四位上大椋神正四位下と見
元たる當郡伊部磐座神社大野郡磐座神社高於磐座
ハど皆所以有る能登國鳳至郡石倉比古神社有ハ
更なる傳世百十丁ハ注るガ如く大己貴神以下の社
ハ多く坐ハ此神の御在し坐さる事やハ有べきと今
此を探索るハ羽咋郡推葉圓比咩神社見元たる推葉
圓（ワツブラ）圖と云べき發語ハて圓比咩神と申すハ攝津國西
成郡圓江の地ハて後世津村と云る是なる此神の本

所ハ難波なるを以て御津神社大津神社など申す例なるに合せて今試に云ふ然る故に能登國名勝志に然もやと思しき所以ハ同郡氣多神社名神ハ傳世卷百十丁に注せるが如く御父大己貴神に渡せ給へりと同國名勝志に見るに氣多大神の大祭ハ二月初午日なり能登生國玉比古神社へ神幸成て二夜有て還らせ給ふ云々昔ハ宿女村なる推葉圖比咩神社に宿らせ給へり此神体石動山天漢石三の其一に御在すと云々其天漢ハ御祖命の天安河の誓約に生坐る由を以て其神体に号けたるなり但能登郡伊須流支比古神社今ハ石動山天平勝宝寺と云ふ其寺説に南閻浮提各有護命其護命者石也名朝字動宝竹字是日月星之三精生万物種子云々と云る是なる可し所祀第一大宮伊弉諾尊第二客人伊弉冊尊第三大宮藏王大物主命第四梅宮鎮定天目一箇命第五歓宮降魔市杵島姫命と云る中に藏王ハ又彦名命なるを然云ふハ其火宮ハ大己貴神又彦名神を一所に祀れるなる可し市杵島姫命ハ下照姫命の御



祖に坐を以て圖比咩神と同神と云なり越中國婦負郡鵜坂神社ハ右百五十一に注せる伊賀郡山田郡鳥坂神社ハ下照姫命に坐と同体なる可くや万葉十七四十九丁婦負郡渡鷀坂河邊作歌一首宇佐可河泊和多流瀬於保美許乃安我馬乃安我枳乃美豆乎彼奴〻礼に家里と有て名高き地なり今も鵜坂神社鵜坂村に坐と云り神階ハ續後紀に嘉和十二年九月乙巳朔奉授越中國婦負郡從五位下鵜坂神從五位上三代實録に貞觀二年五月廿九日戊寅進越中國鵜坂神階加從四位下同四年十月九日甲辰越中國從四位下鵜坂神從四位上同九年二月廿

七日丁酉授越中國從四位上鷄坂神從三位と所見たり（神名帳考證ふい同四年十月九日）越中國正六位上鷄坂姉比咩神鷄坂妻比咩神並授從五位下と有ハ今本ふい無れども床しき事なり（七月廿三日鷄坂社ニ詣て鷄坂神ノ示日あり）夫木集ニふ如何ふ爲ん鷄坂の森ふ見ハ爲とも君が苔の數るゝぬ身ハ（と云哥を載せて）有り俊頼朱ふ是ハ越中國鷄坂明神の祭の日龍眼木の苔ふて男（せの）たる數ふ隨ひて女を擊ち其時ハ祢宜ふ臀（シリ）を任せし默す祢宜苔を持て數を問ふ多ふて女耻て隱せバ忽神罰を蒙るとや彼祭をバ杖立（ミヒドグテ）の祭とぞ云傳へたり但古歌の見えねバ自の哥を書

て侍るあり云と又八雲御抄ふも載させ給へる大抵同じ意あり右ふ注る伊賀國鳥坂神社ふも昭子内親王祈りても詮なく無れ獨子を何時も鳥坂の神垣の内ど詠せ給へるあどを思ふ夫婦の中間を守らせ給ふ神と所見たり右の鷄坂杖も男多く爲る事を罰め耻しめ給ふ神事るふ就て思ふふ古事記須勢理毘賣命の大國主神へ進らせ給へる御歌ふ阿波母與賣迩斯阿礼婆那遠岐氏袁波那志那遠岐氏都麻波那斯と有を見奉れバ然る徒事を深く惡るせ給ふあり（元とこの水筑前ニ祭ル所ノ神ナリ）けり斯れバ鷄坂ハ地名ふも非ず坂ふ因れるふも非

鳥坂鷄坂共ニ借字ニて宇佐神の謂ありむり然見て
も下照姫命ハ其御女ニて御在ーー坐せば共ニ鎮坐す
と思いもニ違ふ事非ずーー此御事已ニ傳三十千五十一
ヲ注りき此鷄坂神社ハ並びて杉原神社有ハ伊賀
生大明神と申すも合ひ又新川郡神度神社ハ古事
記ニ阿遲志貴高日子根神の天若日子が喪屋を切伏
給ふ所ニ其持所切大刀名曰大量亦名謂神度叙と有
ニ思合せ〳〵り〳〵田有て右百五十四下飛彈國の所ニ
已ニ注り右ハ下照姫命を齋祀れる神社の太抵ありか如ーー
其外諸國ニも猶多ーーと雖も傳三十千十七下以下ニ古事記
を引て高比賣命亦名下光比賣命と有る文を注ーて
其所ニ云ハば此ニ引合せ讀て委ーー明らむ可き者

ありりーー○要ハ此も古事記も其妻と爲るハ下照姫
命のみ有と第一ノ一書ニハ多要國神女子と有りりハ
猶佗神の女とも多く要ありたりーーありけり○留住ハ
第一ノ一書ニ經八年無以報命古事記ニも至于八年不
復奏と有ニ如く顕國の年の來經を八年ニ及ぶまて
天神の勅旨を空ーーく爲て徒ニ過ーーるが留住と
云例ハ佗ーり行到て其地ニ落著く事を云ありハ
第四ノ一書ニ故天孫留住彼處と有ハ天上より
降給ひて此處を住所と定させ給へりを云ひ海宮遊
行章ニ彦火と出見尊因要海神女豊玉姫仍留住海宮
已經三年と有ハ本ーーり還坐ざるり御心ありかハ非れ

○此下ニも故皇孫就而留住と見えタリ

ども其豊玉姫命と夫婦の御語りひ御在ーし坐ーりバ
其が爲ふ海宮の君主の如くーして御在ーし坐ーを云ふ
り此も其如くゆて下照姫命と夫婦と成れりー隨ふ
其本土を忘れて全く此國神の如く成れりーを云ふり
但此ハ其下照姫命の許ふ住著れーるりゆて昔ハ女
を娶るふハ男の方より女の許ふ通ひて交會を爲
る故ふ其を住と云り記傳廿三四十八丁ふ共婚供住之間
ハ六字を引合せて須米流本枝ホと云り万葉四十五丁
ふ君家尓吾住坂乃家道乎毛と訓りも通住む事を墨
坂ふ云係たるり古今戀四典侍藤原因香朝臣の哥

の詞書ふ右大臣住すりりけれバ云ハ又戀五ふ業
平朝臣紀有常ふ女ふ住けりを恨る事有て暫の間畫
ハ來ータさりハ還のしーけれバ云ハ拾遺物名ふ年
を經て君をのしりり寢住つれ異腹ふやハ子をバ生
べき此ハ婚する事を寢住と詠り亂を隱せる詞ふり
此外歌物語ふどふ常多く云る事ふり撮と有ればり上
の娶字ふ引合せて此意をも加へ見る可くふも有け
る其ハ次ふある吾亦欲馭葦原中國と有ハ其下照姫命
ハ稚國玉神とも申して御勢の盛大ふ御在ーし坐す
許ふ留り住ーりバ其住ふ此神の上ふ立て國を御ひ
と負氣無き心の起りー狀ふるふ合せて說く事ふり
○吾亦欲馭葦原中國と有る亦字ハ何れふ對へて云

あるゝも之考らふ上ふ此神亦不忠誠也と有ハ天穗
日命を不忠誠として其神ふ絶ぐ義あるを此ハ其神
ふ係て云べき所あるゝず上章第六ノ一書大己貴神の興
言ふ夫葦原中國本自荒芒至及磐石草木咸能强暴然
吾已推伏莫不和順遂因言今理此國唯吾一身而已其
可與吾共理天下者蓋有之乎と有が如く此大神の天
下を摠持たゝせ御在ーしゝ坐ーしゝバ其神の馭給ふ國を吾
亦馭めもと云らふて天神の御爲ふも國神の爲ふも
甚忠誠あるゝ心を起ーつるありけり古事記ふハ
慮獲其國と見えたれば其舅と有る大己貴神をバ賺

ーしゝ拵へむとてこゝろ其御婚ふハ成がたゝけゝーしゝ是天神
の御命を過てらありけり然云所以ふ上九十ふ八丁ふ注ら
如く天神ふハ素ら大己貴神の御上ふ於てハウら
も疎ミ給ふ大御心の御在ーしゝ坐ゝるを天穗日命を國
体見ふ遣ーし給へらが其復奏の遲きふ依て國神の荒
び共有むらと所思ーして此ふ天稚彦を征伐とーして天
降ーし給へらあり然ーして大己貴神の御許あてハ天神
ふ皆奉ら御心御在ーしゝ坐ゝるが故ふ征伐の御使をバ
受ゝせ給ふ御心御在ーしゝ坐ゝる事第二ノ一書經津主神
武甕槌神の行向ひ給ひーし所ふ疑汝二神非吾是處來者

と申給へるを以知られたり然しかは天稚彦が御許に
近着く事は上百二十五丁に注る如く味耜高彦根神の后
天御梶日女命の御兄弟に坐を以あり谷重遠説に天稚彦既與敵國結婚と云れども大己貴神の國土を造固めさせ御在
坐て大國主神と成らせ給へるは私の御事にて御在
且ても御在坐りければ天神の御爲に御敵と申
さむ事は甚しき強説なるを古より人皆得覽らざりし
故に其論悉く過ず偖天稚彦は終に忠誠なるざる
妄なるに過矢の御罰を得奉るに至りしかども始よ
り然る惡神なるもの思兼神も此神と議奏されよ
く將天神よりも征伐の御使の重任をば授させ給
ふまじかりければ大己貴神の御婚と成給へるも

下照姫命の其妻と成給へるも此所に於て更に罪有
すべき事なりけり然るに天稚彦此に其下照姫の夫
と爲しは大己貴神の公主を娶れる光あて在ける國
神の崇敬は更にも云ず威福共に盛に成りしかば
荒振神等をば討平ぐらむ思ひ絶て終に其大己貴神
の主領き御在坐す此國土を馭めむと思成しかば
其心傲の萌ける初より疎び荒ぶる邪鬼の依託ける
に終に相交らしに事は此に吾亦欲馭葦原中國と云
ふ心行に成れるをて知られ其相口會に事は次に
天探女が言進むるに隨ひて天神の御使を射斃した

るかて知られなり終に畏矢の御罰を得奉りしハ全く殘賊强暴横惡之神の爲に忠誠あるべき神とし成果られしハ甚淺あるあども云へバ更なり猶次條に委しく注す可し其妖氣の甚しき時ハ猶有る事に奏せらるゝに就て乃遣無名雄雉往候之此雄飛來因見栗田豆田則留而不返此世所謂雄頃使之緣也と見えたる此雄も天神の御命を奉て降れるあれバ其始ハ此國に來到て天雉彦が消息を見旦大命を何方迄も宣べくして降り事今云迄非り事なり然るに栗田豆田と見たい返るを忘れ果て終に雄の頃使と云る事と成しも此等ハ卑しき者なり故に不忠誠の名を以て攻られ也天雉彦と事ハ一なり其志す所有て成す事業の中休にして折け止むと云ハ其本心に非るが其即荒振る物の爲に心を奪ハ祁鬼の依託るを以なり○遂不報命第一一書に經八

国立公文書館
National Archives of Japan